

じ生命倫理の問題でも、文化ごとの生や死の観念に違いによって、議論の焦点に大きな違いが生まれることが分かる。

本書は、基本的人権について、イスラーム法の規定と各国の制定法とを比較しながら論じており、イスラームにおける人権思想を体系的に示したものとして、大きな意義をもつであろう。個別の具体的な事例について研究する場合に、本書が貴重な補助線を引いてくれることは大きな助けとなる。特に、法規定の根拠となっているイスラーム法の原則を明らかにしている点が貴重であり、「イスラームの目的（マカーシド）」を中心とするイスラーム法の原理・原則が、法解釈に果たす役割を明らかにしている点が高く評価される。さらに、各主題において、同じ法学派の中でも立場が分かれることがあり、それがどのような違いに基づくものであるかが丁寧に描かれており、非常に興味深い。

参考文献

- 森伸生 2006 「イスラーム法と現代医学——脳死と臓器移植問題を通して」『シャリーア研究』3, pp.63–80.
- Kamali, Mohammad Hashim. 1997. *Freedom of Expression in Islam*. Cambridge: The Islamic Text Society.
- . 1999. *Freedom, Equality and Justice in Islam*. Malaysia: Ilmiah Publishers.
- . 2002. *The Dignity of Man: An Islamic Perspective*. Cambridge: Islamic Texts Society.
- Sachedina, Abdulaziz. 2009. *Islamic Biomedical Ethics: Principles and Application*. New York: Oxford University Press.

(井上 ひかり 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

Ahmet T. Karamustafa. 2007. *Sufism: The Formative Period*. Edinburgh: Edinburgh University Press. xii+202 pp.

著者 Karamustafa の専門は、中世アナトリアのイスラーム社会思想史である。著書にはオスマン朝（13～16世紀アナトリア）におけるデルヴィーシュとタリーカとの関係を描いた *God's Unruly Friends* [Karamustafa 1994]、博士論文を基にした16世紀オスマン語神秘主義テキストの校訂・分析である *Vahidi's Menakib-i Hvoca-i Cihan ve Netice-i Can* [Karamustafa 1993] があり、論文 “Early Sufism in Eastern Anatolia” [Lewisohn (ed.) 1999 (1993): 175–198] では、12～13世紀アナトリアの初期スーフィーたちを紹介している。

さて本書 *Sufism: The Formative Period* はエディンバラ大学出版会のイスラーム概説シリーズ *The New Edinburgh Islamic Surveys* の一冊であり、最も新しいスーフィズムの概説書でもある。代表的なスーフィズムの概説書として、[Nicolson 1914]、[Arberry 1950]、[Schimmel 1975] などが挙げられるものの、中世までが主な範囲であった。近年では射程をさらに延ばし、[Baldick 1989]、[Ernst 1997]、[Knysh 2000] などが現代までの流れを描いている。

現代までのスーフィズム通史を描こうとする傾向に対し、本書は敢えてスーフィズム初期（およそ9～12世紀）に焦点を絞る。最も研究が進み、多くの概説書があるスーフィズム初期へ新たな

一冊を加えることの意義について、Karamustafa 自身は以下のように説明している。

古典期の研究は後世の研究の基礎であり、ここ数十年で理解が飛躍的に進んだ。未だなされるべき課題は多いものの、多言語に亘る研究成果を暫定的にまとめる機は熟した。本書 *Sufism: The Formative Period* は、「スーフィズム初期史の包括的で最新の文脈化」“comprehensive and up-to-date contextualization of the early history of Sufism” (p. viii) の必要に応じたものである。

Karamustafa の立場は、超歴史的なスーフィズムの存在を否定し、時代・地域によってスーフィズムが様々な形態をとってきたことを明らかにしようとする Knysh と同じである。「神秘主義や精神性」“mysticism or spirituality” (p. vii) といった言葉が無批判に使用され、不変の要素であるかのように見なされてきたことに対し、Karamustafa は異を唱える。従来の「本質主義化した手法」“essentialising approaches” (p. vii) は、神秘主義や精神性を自明のものとし、歴史的状況に考慮せず使用してきた。これに対し、「歴史的で文献学的な手法」“historical and philological approaches” (p. vii) によって歴史的な文脈に適切な注意を払おうとするのである。これは、地方で興った神秘主義と首都バグダードの神秘主義の関係性を取り上げた [Chabbi 1972: 5-72] 以降のひとつの研究態度といえる。

一世代前のオリエンタリストたちとの違いとしてもう一つ挙げられるのは、スーフィズムの起源を他宗教に求めない点である。Baldick のようにスーフィズムの成立に他宗教が中心的役割を果たしたとまで断言するかは別として、たとえばスーフィーの語源とされる「羊毛を纏う者」は、シリアのキリスト教神秘主義者たちの格好と同じであることが必ず言及されてきた。イスラーム発祥以前の伝統的宗教がスーフィズムへ与えた影響について省略したことを、Kafamusutafa は自ら認めている (p. ix)。信用に足る資料が乏しく、「今後の研究の発展を期す」とのことらしい。

いよいよ本書の内容に入っていきたい。*Sufism: The Formative Period* の章立ては以下の通りである。

- 第一章「バグダードのスーフィーたち」(The Sufis of Baghdad)
- 第二章「バグダード以外の神秘主義者」(Mystics outside Baghdad)
- 第三章「バグダード・スーフィズムの拡大」(The spread of Baghdad Sufism)
- 第四章「専門化したスーフィー文献」(Specialised Sufi literature)
- 第五章「共同体の形成」(Formation of communities)
- 第六章「聖者性の勝利」(Sainthood triumphant)

それでは各章について概観する。

第一章「バグダードのスーフィーたち」

アッバース朝カリフが治める9世紀のバグダードには、内面志向の禁欲主義 (zuhd) が広まっていた。ラービア・アダウィーヤ Rābi'ā al-'Adawīya (d. 801) などに代表される禁欲主義は、スーフィズムに受け継がれる思想を多く生み出した。禁欲主義とスーフィズムの関係について Karamustafa は、スーフィーという新しい言葉を与えられたことで禁欲主義から新しい運動「スーフィズム」が生まれたとする。そして元々の語源であった「羊毛を纏う者」という意味は失われ、スーフィズムに属する者がスーフィーと呼ばれるようになったとする (pp. 6-7)。

上記のような経緯でバグダードにスーフィズムが誕生したとして、その内実はどのようなものであったか。初期のスーフィーたちは、神に関する事柄に人間の理性を適用しないという点でハンバル学派と近かった。しかし法学者を兼ねることもあったスーフィーたちは、徐々に他の法学派との提携も進めていく (p. 22)。

章末では、ハッラージュ al-Hallāj (d. 922) の処刑は後世のスーフィーたちにスーフィズム迫害の象徴的出来事として語られてきたが、当時のスーフィーたちにとってはほとんど無関係の出来事であったことが強調される。つまりハッラージュの処刑は、彼がスーフィーであるからではなく、バグダードの政治闘争に巻き込まれたため行われた。スーフィズムは中道を上手く保っていたため、その後も順調な成長を続けたというのである。

第二章「バグダード以外の神秘主義者」

同時期、バグダード以外の地域にも神秘主義が出現していた。低地イランのバスラで活躍したトゥスタリー al-Tustarī (d. 896)、トランスオクシアナ地方のハキーム・ティルミズイー Al-Ḥakīm al-Timidhī (d. 905-910)、ホラーサーン地方のマラーマティーヤ al-Malāmatīya (日本語で「非難の徒」と訳される集団) が本章では取り上げられ、相互の類似点および接触の可能性が言及される。

まずトゥスタリーとバグダードの関係について確認されていることは、トゥスタリーの死後、その弟子であったハッラージュらがバグダードのジュナイドの許へ行ったことである。ティルミズイーに関しては、各地の神秘家たちと魂 *nafs* を論じた書簡が残っている。ティルミズイーと文通があったマラーマティーヤは、絶え間ない自己非難(マラーマ)で魂の修養に努める人々である。構成員の名前から判断する限り彼らは職人や商人といった中産階級であり、彼らの職業倫理である「若者らしさ」(*futuwwa*) との親和性が高かったため受容されたとされている (p. 49)。彼らのうちの何人かは実際にバグダードを訪れてジュナイドなどに会っており、ジュナイドの弟子がホラーサーンを訪れ、「マラーマティーヤは魂と神の二元論に陥っている」と批判したこともあったことが紹介されている。

第三章「バグダード・スーフィズムの拡大」

バグダードのスーフィズムが各地に伝えられた一例として、イブン・ハフィーフ Ibn Khaffif (d. 982) の伝記が示される。バグダードのスーフィーであった彼は、イラン西部やヒジャーズ地方の神秘家を訪ねている。

ハッラージュに代表されるスーフィズム迫害がバグダードであったため、各地へスーフィーたちが散っていったとするのが Louis Massignon や前述 Chabbi の説であったが、Kafamusutafa の見解は異なる。少なくともホラーサーン地方におけるバグダード・スーフィズムの受容は、マラーマティーヤがカッラーム派に対抗するための手段であったというのだ。カッラーム派はこれ見よがしの禁欲行為で人目を引き、生計を得ることを禁じ、活発に説教を行っていた (p. 61)。これは禁欲行為を決して表に出さず、社会規範に従うことを是として法学との連携を進めていたマラーマティーヤの対極であった。

しかしマラーマティーヤとスーフィズムの思想を矛盾なく「融合(fusion)」させているのはアブー・アブドゥッラフマーン・スラミー Abū 'Abd al-Rahmān al-Sulamī (d. 1021) だけであり、この時期の他の著作は両者の対比になっている (pp. 62–69)。

第四章「専門化したスーフィー文献」

10世紀よりスーフィズム専門の文献が現れ、「規範的なスーフィーの伝統 (normative Sufi tradition)」を確立することになる。これらは概説と伝記に二分できるが、Karamustafa は更に細分して表にまとめている (pp. 84–87)。

著作による理論化は、スーフィズムを特徴づけるとともに周囲との緊張関係をも生む。ハンバル学派などの伝統主義と協調するため、スーフィズムはクルアーンやシャリーアに理論の基盤を求めた。また、理論に沿ってスーフィズムの修行をマニュアル化することが可能となる。ホラーサーン地方で活躍したアブドゥッラー・アンサーリー 'Abd Allāh Anṣārī (d. 1089) は初めてペルシア語で手引書 (pedagogical guidebooks) を書いた人物であるが、各地にスーフィズムがかなり根付いてきた証左となる。

スーフィズムの型がある程度定まってくると、外見だけ真似をする形式主義者たちも現れた。早くも11世紀にフジュウィーリー Hujvīrī (d. 1072 or 1076) が、本物のスーフィーがいなくなってしまったことを嘆いている (p. 100)。これ以降は法学や神学からの攻撃からスーフィズムを守るため、あるべきスーフィズムの姿について議論が重ねられることとなる。

第五章「共同体の形成」

前章では文献によるスーフィズムの確立を見たが、本章では共同体の形成によるスーフィズムの確立に焦点が当てられている。

後のタリーカへとつながるスーフィーたちの共同体は、卓越した師の周囲に人が集まってきたことより生じた。これはスーフィズムの最初期 (ジュナイドやトゥスタリーなど) より起こっていた現象であり、師の死後は弟子が引き継ぎ、地域的共同体を運営していた (p. 114)。このような形式が定着すると、共同体は入門者の修行の成果に責任を負うようになる。11世紀頃にスーフィズム修行法が確立されるに従い、師の権力が強化され、どの師の系統であるかが重視されるようになったと Karamustafa は指摘する。弟子に絶対服従を迫る根拠としては、再びクルアーンが援用された (pp. 118–119)。

さて本章でもうひとつの要点となっているのが、聖者信仰の問題である。スーフィズムが社会に浸透するにつれ、スーフィズムの聖者論も知られるようになった。しかし民衆にとっての聖者は、スーフィズムの理論を離れて独り歩きを始める。民衆にとっての聖者は奇蹟を与えてくれる人物のことであり、聖者は必ずしもスーフィーに限定されなかった。12世紀に盛んに書かれるようになった参詣 (ziyāra) 案内書の挙げる聖者たちが、このことを示唆している。すなわち参詣によって恩寵を与えてくれる対象に、預言者たち、ムハンマドの家族と子孫、教友、殉教者、シーア派イマーム、正統カリフ、支配者、学者、神学者、裁判官などを含めていたのである (pp. 133–134)。

第六章「聖者性の勝利」

バグダードという一都市から始まったスーフィズムであるが、学を求めるスーフィーの放浪や、利益を求める民衆の参詣行為により各地を結ぶまでに広がったことを前章までで確認した。

スーフィズムの師が聖者として民衆の崇敬を集めるようになると、支配者たちもスーフィズムに対して関心を向け始める。セルジューク朝の初代スルターンであるトゥグリル・バク Tughril Beg (d. 1063) が、伝説的な詩人かつ聖者のバーバー・ターヒル Bābā Ṭāhir の加護により王権を得たとの言説が12世紀に作られている (pp. 152–153) が、これは支配の正統性として聖者の祝福を用いることが可能であったことを示している。スーフィーの知見や執成しに対し、支配者は免税などの特権という見返りを与える関係であったのではないかと Karamustafa は考える (pp. 153–154)。スーフィーと政治家たちの接触はいくつか確認されている。また一方で、スーフィーに対する民衆の支持を脅威と感じた支配者たちが、彼らを弾圧することもあった (p. 155)。

スーフイズムは修行者たちの共同体の枠に留まらず、修行道の師とはなりえない聖愚者 *'uqalā al-majānīn* や説教師も含むようになっていた (pp. 150–151)。11～12世紀には、清貧さや放浪の点ではスーフイーと共通するものの、関連や境界が明らかではないデルヴィーシやカラングルといった集団も現れる。最早スーフイズムの範囲はスーフイーたちの手に負えない状況になっていったと思われるが、彼らの奔放な振る舞いはスーフイズムの名に帰せられてしまう。神学者や法学者たちよりイスラーム規範の逸脱を問われると、再びスーフイズムの再定義が行われ、「誤ったスーフイズム」を例示する文献が書かれた。しかしマラーマティーヤの例に顕著であるが、批判対象の本来の姿を歪めている可能性がある。第3章で確認したように、ホラーサーン地方のマラーマティーヤは自己非難を内面で行う人々のことであったが、奇抜な行為により他人の非難を受ける人々として描かれているのである (pp. 160–162)。

以上が概観である。本書は、研究がどの程度まで進められているのかを誠実に反映させた良書と評価できる。豊富な注記により一次資料を含めた出典が明示されているため、関心をもった分野に取り掛かる際には絶好の指針となるであろう。本書の狙いである、現時点での研究成果を包括した概説書としての役割は十分に果たしている。加えて、やや証拠不十分であっても新しい視点を提示するという積極的な態度も忘れていない。続く時代の記述が早期になされることを期待する。

ただし欲を言うならば、著者の掲げる反本質主義の目指すところをもっと前面に出してもよかったのではないだろうか。「神秘主義」や「精神性」といった言葉を歴史的文脈に合わせて用いることを序文で提唱していた Karamusutafa が、これらの言葉をどのように定義するのか期待しながら評者は読んでいた。しかし、時代や地域によって「スーフイズム」という言葉が指すものに違いがあることは本書によって浮き上がってきたものの、明確な定義付けを行える段階にまでは達していないことが残念であった。古典期ということで資料が乏しかったり、執筆の意図から外れる恐れがあるといった制限があるのだろうが、各地の社会・政治・経済状況についてももう少し詳しい記述があれば、時代や地域の比較がもっと鮮明になっていたのではないだろうか。

Karamusutafa 自身が「神秘主義」という言葉を定義なしに使っていることに、評者は幾許かの懸念を抱く。というのも、「神秘主義という言葉で読者があるイメージをもつことができることを前提としているならば、神秘主義が本質をもつことを認めていることにならないのか」という批判を容易に想定できるからである。Karamustafa の想定する本質主義はもっと極端なものかもしれない。しかしそれならそれで、つまらぬ反論のつけいる余地を残さないためにも、著者は己の立場に忠実であるべきであったかもしれない。公平な記述を心掛けるばかりに生じてしまったと思われる矛盾が散見される。その最大のものを一つだけ指摘して本稿を終わろうと思う。

広義スーフイズムが成立したとする時点でさえも、スーフイズムについての合意はない。このことは Karamustafa の主張したいスーフイズムの多様性を示すとともに、人々がスーフイズムという言葉で共有できる何らかの本質を認めていたことにもなる。スーフイズムの多様性を「バグダード・スーフイズム」といった言葉で分類していくならば、広義スーフイズムが成立した後もスーフイズムは変化し続けていく。それらに延々と新たな呼称を与え続けていく徒労を避けるための線引きは、どこで引くつもりなのであるだろうか。あるいは完璧な分類を完成させるつもりなのであるだろうか。今後も Karamusutafa の反本質主義の試みに注目していきたい。

本文で言及したスーフィーの人名表記および没年は『岩波イスラーム辞典』(大塚和夫ほか編、岩波書店、2002年)の記述を優先したため、一部出典のままではない。

参考文献

- シンメル、アンネマリー 1988「古典的スーフィズム——神秘思想とその象徴的表現」『イスラーム思想2』(小田淑子訳) 岩波書店.
- ニコルソン、R. A. 1996 (1980)『イスラームの神秘主義——スーフィズム入門』(中村廣治郎訳) 平凡社.
- Arberry, Arthur J. 1950. *Sufism: An Account of the Mystics*. London: Allen & Unwin.
- Baldick, Julian. 1989. *Mystical Islam: An Introduction to Sufism*. New York: New York University Press,
- Chabbi, Jacqueline. 1972. "Remarques sur le développement historique des mouvements ascétiques et mystiques au Khurason," *Studia Islamica* 46, pp. 5–72.
- Ernst, Carl W. 1997. *The Shambhara Guide to Sufism*. Boston and London: Shambhala.
- Karamustafa, Ahmet T. 1993. *Vahidi's Menakib-i Hvoca-i Cihan ve Netice-i Can*. Cambridge, Mass.: The Department of Near Eastern Languages and Civilizations, Harvard University.
- . 1994. *God's Unruly Friends*. Salt Lake City: University of Utah Press.
- Knysh, Alexander. 2000. *Islamic Mysticism: A Short History*. Leiden, Boston and Köln: Brill.
- Lewisohn, Leonard (ed.). 1999 (1993). *The Heritage of Sufism: Classical Persian Sufism from Its Origins to Rumi*. Oxford: Oneworld Publications.
- Nicolson, Reynold A. 1914. *The Mystics of Islam*. London: G. Bell and Sons.
- Schimmel, Annemarie. 1975. *Mystical Dimensions of Islam*. Chapel Hill: University of North Carolina Press.

(石田 友梨 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

Hossein Askari, Zamir Iqbal, and Abbas Mirakhor. 2009. *New Issues in Islamic Finance and Economics: Progress and Challenges*. Singapore : John Wiley & Sons.

1970年代に商業ベースでのイスラーム金融の取り組みが始まって以降、イスラーム経済やイスラーム金融についての様々な研究が行われてきており、それらの研究は「イスラーム経済学 (Islamic Economics)」と総称されている[長岡 2008: 280]。長岡慎介による研究サーベイによると、イスラーム経済学における研究は大きく2つのアプローチに分けられる[長岡 2006: 237–243]。1つは、現代世界にイスラーム経済システムを再興させることをめざす場合にどのようなしくみが望ましいのかを考える理念的な研究であり、もう1つは、イスラーム金融の具体的な業務(金融商品の開発、金融サービスの提供など)がいかに従来型の金融システムと競争しうるかという事例中心の金融論的研究であった。

しかし、長岡[2006]でも指摘されているとおり、両者のアプローチはいずれも、掲げられた理論が本当に実効性を持つのか、また、実態からの理論的検討へのフィードバックがあるのか、といった問題をはらんでいた。近年では、従来からの研究アプローチの限界を打破することをめざした研究がさかんになりつつある。評者の所属する京都大学でも「京都大学イスラーム地域研究センター」